

平成27年度 しが生物多様性大賞審査会 講評

滋賀県と滋賀経済同友会の共催により平成25年度に創設されました「しが生物多様性大賞」。3年目となる今年は、県内各地から6件の応募をいただきました。

審査の結果、今年度の「しが生物多様性大賞」においては、2つの活動に対し、知事から賞が贈られることになりました。

1件目は、積水化学工業株式会社 滋賀栗東工場「工場の部材を有効活用した、琵琶湖の生物多様性保全活動」。

2件目は、株式会社琵琶湖ホテル「里山の食彩プロジェクト」です。

それぞれに講評を述べさせていただきます。

まず、積水化学工業株式会社滋賀栗東工場「工場の部材を有効活用した琵琶湖の生物多様性保全活動」です。積水化学工業株式会社・滋賀栗東工場では、事業活動を通じて生じる合成木材の端材を「魚のゆりかご水田」に用いられる魚道の材料として提供され、地元自治会のみなさまと一緒に制作、設置にまで取り組まれておられます。設置された魚道の有効性についても調査をされているほか、水田オーナーへの参画や、社員食堂でのお米の提供など、「ゆりかご水田」を軸に、様々な角度からの取り組みを展開されています。

「魚のゆりかご水田プロジェクト」という、滋賀県が推進する取り組みに着目し、そのより効果的な発展のために、事業を通じて得られる廃材を活用する、というユニークな視点と、滋賀県や自治会との協働により、有効性の高い取り組みを展開されている点が高く評価をされました。水田と水路を結ぶ道は、ニゴロブナをはじめとする滋賀のいきものたちにとってまさに「いのちの架橋」です。

今後より一層の活動の発展とともに、いつか滋賀の風景のなかで、魚道のある水田が「あたりまえ」として位置づけられる日を期待しています。

2件目の、株式会社琵琶湖ホテルの「里山の食彩プロジェクト」では、「食べることが守ること」を合言葉に、2002年から同プロジェクトに取り組まれています。日本の生物多様性の象徴でもあり、特に滋賀におけるその豊かさが今森光彦氏の作品を通じて国際的にも発信されている「里山」の環境を守るには、その地で農業が営まれ続けることが不可欠であり、このため里山で生産されるお米などの食材を活用したメニューの開発、お客様へのご提供に取り組まれています。また、スタッフの皆さんが生産に携わられたお米を使ったオリジナルのお酒の製造や、琵琶湖沿いの歩道に備えた植栽スペースに、里山の田んぼの畦をモチーフに110種の山野草を植えられるなど、新たな試みも続けられています。

2002年という極めて早い時期から、「我慢を強いるのではなく、お客様にも喜んでいただき、自身も本業の中でビジネスとして取り組む仕組みがあればこそ、活動が継続する」という明確な思いの下、170室あまりを有する大きなホテル、かつ決して豊かな自然に隣接しているとは言えないある種厳しい条件の中で、社員の皆さん自らが試行錯誤しながら独自性の高い取り組みを続けられており、これから生物多様性への取り組みを検討される様々な皆さんの参考になるものである、と評されました。

今回の審査は過去2年間にも増して甲乙つけがたく、選考に際し、非常に頭を悩ませました。そのなかで私たち自身が改めて、本表彰制度が設けられた際にキーワードとして掲げた「協働」そして「滋賀らしさ」について考えさせられました。

結果、「いかに自らの頭で考え、関わる皆が主体的に役割を果たし合っているか」という点を重視し、この2つの取り組みを選ばせていただきました。

また、以上2つの知事表彰に加え、今年は滋賀経済同友会からの「琵琶湖を戻す会」様に特別賞を授与させていただきます。

「琵琶湖を戻す会」の皆さんは、「5月の最終日曜日は、琵琶湖外来魚駆除の日」と定め、外来魚駆除のための釣り大会を主催されています。14年という長い年月の中で、琵琶湖の外来魚問題を広く知らしめ、多くの人々が「外来魚釣り」を通じて琵琶湖の現状を知るためのプラットフォームを作られた功績をたたえ、本賞を特別に設けさせていただきました。